

大正期におけるベルクソン哲学の受容

宮 山 昌 治

はじめに

大正から昭和にかけて、アンリ・ベルクソンの哲学が日本の文化人に与えた影響は計り知れないものがある。哲学界では西田幾多郎、九鬼周造、三木清、高橋里美、和辻哲郎、澤瀉久敬などが、論壇では大杉栄、野村隈畔、中沢臨川、稲毛詛風、福来友吉などが、そして文壇では有島武郎、夢野久作、小林秀雄などがベルクソンの強い影響を受けている¹⁾。戦前の日本において、ベルクソンはデカルトと並んで（時にはそれ以上に）まさしくフランスを代表する哲学者だったのである²⁾。

なぜ、ベルクソン哲学は日本でこれほどの影響力をもつことになったのか。そして、ベルクソン哲学は日本ではどのように読まれたのであろうか。本稿はこれらの問いの解明に端緒をつけるために、ベルクソン受容の濫觴期（1910-1916）の考察を行なうものである。

考察にあたって、とくに注目したいのは1912年から1915年にかけて巻き起こったベルクソンの大流行である。このわずか四年の間に、ベルクソンについての論文や解説書、著作の翻訳が続々と発表されて、後年類を見ない“ベルクソンの大流行”と言うべき現象を巻き起こした³⁾。これを機に、ベルクソンは広く知られるようになったのであり、ベルクソン受容史において、この大流行は非常に重要な意味をもつのである。

大流行の意味を探る上で、まず問わなければならないのは、なぜ大流行の波が突如澎湃として起こり、それは数年後杳気なく消え去ったのかということである。すなわち、ベルクソン哲学はなぜ注目を集め、そして飽きられたのか。さらに、この大流行がその後の思想界に与えた影響はどのようなものであったか。以下に、ベルクソンの大流行の生成と終焉の考察を行うことによって、ベルクソン受容の濫觴期の思想的位置を確定することにしたい。この作業によって、日本におけるフランス哲学受容のはらむ問題点が、ほんの一部ではあるが明らかになるであろう。

1. 西田幾多郎のベルクソン論

1908年に、吉田熊次は「フランスのベルグソン教授の如きはカントを超えて一步を進みし観がある」と記している。これが日本で最初のベルクソンの紹介文である⁴⁾。だが、紹介はこの一節だけであり、ベルクソン哲学の本格的な紹介は、西田幾多郎の「ベルグソンの哲学的方法論」(1910)⁵⁾と「ベルグソンの純粹持続」(1911)⁶⁾を嚆矢とする。西田のこの二つの論文が呼び水となって、ベルクソンの紹介文が次々に登場し、やがて大正期の初めにはベルクソン哲学の大流行を引き起こすことになる。

それでは、ベルクソンの大流行の礎石となった、西田のベルクソン論とはどのようなものであったかを、以下に見てゆくことにしよう。

「ベルグソンの哲学的方法論」はベルクソンの「哲学入門」(1903)を略述したものであり⁷⁾、「哲学入門」が「物を知るのに根底的に異なる二つの見方の区別」⁸⁾から始まるのに倣って、まず物の「見方」の区別を説いている。そもそも、物の「見方」には「概念的知識」で外から捉える「分析」と、内より物そのものに「成つて内より之を知る」「直観(Intuition)」の二通りがあると言う。物の把捉は科学的な「分析」の得意とするところだが、〈自己〉を対象とする場合には「分析」ではうまくゆかない。「テーンやミル」のような「心理学」や「経験論者」は、〈自己〉を「心理的要素」に分解して「分析」するが、それでは不斷に変化する〈自己〉を把捉することはできない。これに対して、「独逸の哲学者の超越的哲学」、すなわち「合理論者」(カント)は「形式的人格」という抽象的な〈自己〉を立てるが、それは「内容なき」〈自己〉であるから、結果的には経験論者と同じく〈自己〉を把捉するには至らない。そこで、「直観」が必要になると言うのである。

「直観」によって内から〈自己〉を捉えてみれば、〈自己〉には「不斷的流動」があることが分かる。この流動こそ「実在の真相」であり、「内面的継続又は純粹継続(durée interne, durée pure)」⁹⁾なのである。さらに、この「持続」の「緊張」を強めると「永久」となり、弛めると「物質」になると言う¹⁰⁾。こうして、西田は「哲学入門」に依拠しながら、ベルクソンの〈従来の哲学〉への批判と、〈自己〉の内省から得た「直観」と「持続」について解説し、併せて「持続」が精神や物質に変わるものであることを付記した。すなわち、西田はここで、「持続」と「直観」を説く『意識に直接与えられたものについての試論』(以下『試論』)と、わずかではあるが、「持続」と「物質」の関係を紹介したことになる。

次に、「ベルグソンの純粹持続」であるが、これは前半は「ベルグソンの哲学的方法論」を再説したもので、後半は『創造的進化』の簡単な解説である。すなわち、「純粹持続」は「創造的発展(Creative evolution)」性を有し、「生命の原始的衝動(l'élan vital)」によって「物質を破つて個性を樹立」する。そして、人は「直観」によって「純粹持続」に到達し、

世界を変える「自由」を獲得すると言うのである。

西田は二つのベルクソン論で、「持続」を軸にして『試論』の「直観」、『創造的進化』の「進化」と、わずかではあるが『物質と記憶』の「物質」を紹介したが¹¹⁾、実は西田のベルクソン論の枠組は、同時期に刊行された『善の研究』（弘道館、1911）の枠組とほとんど同じものであった¹²⁾。すなわち、「純粹持続」と「直観」は、『善の研究』では「第一編 純粹経験」の「純粹経験」と「直覚」にほぼ対応するし¹³⁾、「純粹持続」の発展、進化は、『善の研究』の「第二編 實在」の「實在」が「発展」、「進化」という記述に対応している¹⁴⁾。だが、両者は完全に一致しているわけではなく、そもそもベルクソン論には、『善の研究』の「第三編 善」、「第四編 宗教」に対応する記述はないのである。西田がベルクソン論で触れなかったもの、それはなにを意味するのであろうか。この問いに答えるには、『善の研究』の第三編以降がどのような位置にあったかを見ておく必要があるだろう。それについては、「第三編 善」の冒頭に次のような一文がある。

實在は如何なる者であるかといふことは大略説明したと思ふから、之より我々人間は何を為すべきか、善とは如何なる者であるか、人間の行動は何処に帰着すべきかといふ様な実践的問題を論ずることとしよう¹⁵⁾。

これによると、第三編以降は、第二編までに見出した「實在」が人間の「実践」においてどのように展開するかという〈応用編〉に相当するものであったことが分かる。

西田のベルクソン論にも、実は「実践的問題」を説く〈応用編〉の言及があった。「ベルクソンの純粹持続」の末尾には、「持続」への内潜はすでに説いたので、今度は「持続」からの外向を、すなわち「純粹持続から如何にして知識や物質が出て来るか」という「実践的問題」に取り組みたいとある。だが、そこでは結局、「持続が己を緊張して突進」すれば物質を打ち破ることができるのであり、「持続」と共に突進できる「創造的天才」のみが「自由の天地を潤歩する」と述べるに留まっていた。つまり、西田はベルクソン論では「実践的問題」にそれほど踏み込んではいなかったのである。そればかりでなく、高橋里美の批判によれば、『善の研究』でも、いかにして「純粹経験」から「知識や物質」が発生するかの説明は不十分であり、「実践的問題」を説くことには失敗していると言うのである¹⁶⁾。

しかし、それはこの時期の西田にとっては、「実践的問題」より「實在」や「直観」といった「形而上学」的問題のほうが優先すべきものだったからではないだろうか¹⁷⁾。そして、この「形而上学」的問題の重視は、西田固有の傾向と言うよりは、大正期初めの思想界の一般的な傾向だったのではないだろうか。そもそも、この傾向に合致するものだったからこそ、ベルクソン哲学は大流行したのではないだろうか。また、西田が留保した「実践的問題」は、大流行においてはどのように引き受けられたのであろうか。以下に、ベルクソン哲学の大流行の内実を考察することによって、これらの問いに答えを与えることにしたい。

2. ベルクソンの大流行

ベルクソンの主著三冊『試論』(1889)、『物質と記憶』(1896)、『創造的進化』(1907)についての論文や紹介文が1912年から1915年にかけて続々と登場し、ベルクソン哲学の総体をまとめた解説書も1914年から1915年までに多数刊行されて、ベルクソンは一躍論壇の寵児となった¹⁸⁾。ベルクソンの大流行が論壇で突如として巻き起こったのである。

本章では、この大流行の内実を把握するために、まとまったベルクソン像を示し、かつ流行が終わってからも版を重ねて、後の世代に少なからぬ影響を及ぼしたベルクソン哲学の解説書、中沢臨川『ベルグソン』(実業之日本社、1914)、野村隈畔『ベルグソンと現代思潮』(大同館、1914)、三浦哲郎『ベルグソンの哲学』(赤城文庫、1914)、伊達源一郎編『現代叢書 ベルクソン』(民友社、1915)¹⁹⁾を、雑誌論文も適宜参照しながら検討することにした²⁰⁾(ちなみに1916年から1925年まで解説書は刊行されていない。以下、解説書の著者を中心とした、ベルクソン哲学を肯定的に受容した一群を便宜上〈ベルクソン派〉と呼ぶことにする)。

これらの解説書はそれぞれが独自の視点をとってはいるものの、共通点を二つ挙げる事が可能である。それは、いずれの解説書においても①ベルクソン哲学が〈従来の哲学〉を凌駕したものであること、②ベルクソンが説いたのは「持続」、「直観」、「創造」であること、を説く点は共通している。これは、西田がベルクソン論で強調した二点でもあった。

それではまず、ベルクソンが乗り越えたという〈従来の哲学〉とは、どのような哲学を指すのかを見てみよう。西田は〈従来の哲学〉に心理学、経験論とドイツ合理論を挙げていたが、ベルクソンの諸解説書も、やはり同じようにこれらを挙げて批判している。だが、注目すべきなのは、そこでカントがとりわけ大きく取り上げられ、厳しい批判を集中的に浴びていることである。なぜ、カントばかりが糾弾されたのであろうか。

伊達源一郎は、フランスにおけるベルクソン哲学流行の背景として、アカデミズムのカント主義に対する非主流派の反発を挙げている。それは、日本の思想界の状況にそのまま当てはまるものでもあった²¹⁾。

思想界の風潮が漸く形而上学に向ひたると同時に、天下の気運、人心の趨勢も亦益々生命問題に傾きて、カントの『純理批判』の如き乾枯無味なる哲学には最早飽果てたるに、同国(=フランス、引用者註)の官学のみは依然カントの哲学を宗として天下の人心を圧せんとするが如き傾向を示したるが故に、年少気鋭の哲学者は憤慨に堪へず、ひそかに之が復仇の策を講じ居たり。(p.50)

すなわち、アカデミズムのカント主義はこれまで「生命問題」や「形而上学」を封圧してきたのであり、その反動でベルクソン哲学に期待が集まることになったと言うのである。そも

そも、「カントの主義は人の精神の實在と絶対との領域に入ることを禁じ」（伊達、p.13）るもので、形而上学を否定するものであった。だが、「カント派の唯心論が物それ自らは達すべからざるもの」としたことは、「人をして真理に失望せしめ」（三浦哲郎、p.25）て、思想的なニヒリズムを生んだと言う。そこで、この状況を打開するために、ベルクソンは「カントの用語を藉りて言へば、「絶対」または「物それ自ら」に直接接触れる「形而上学（metaphysics）」（中沢臨川、p.309）を再興したと言うのである。

しかし、ベルクソンの解説書においては、カント哲学と云えば、なぜいつも『純粹理性批判』の「物自体」に焦点が当てられるのであろうか。それには、次のような事情が絡んでいた。

1910年頃に新カント派が紹介されて以来、「大正時代のアカデミー哲学における主流はカント→新カント派哲学」²²⁾だったのであり、「日本ではカント自身の本格的な研究も、新カント派的立場で行われ」²³⁾るほど、日本の思想界における新カント派の影響力は大きなものであった。それでは、「新カント派的立場」とはどのようなものだったのか。新カント派と言っても一様ではないのだが、ベルクソン派ともっとも相容れなかったのは次の一点である。すなわち、カントが『純粹理性批判』で「物自体」の直接把持を否定したことを引き受けて、「物自体」に依拠しない判断の根拠を提示し、認識論を徹底した点である²⁴⁾。

たとえば、リッケルトは「判断の真理は必ず不許不 Sollen に基き實在には依繫し得ない」²⁵⁾として、『純粹理性批判』の「物自体」に触発されるという形而上学の遺制を、「Sollen」（＝「不許不」、「当為」）によって完全に消去した。

あらゆる内在的實在の最後の根柢はそれ自らの中にも或は超越的實在の中にも見出されず、たゞ認識主観の實現すべき超越的理想の中のみ閃見するといふ限りに於て、先験的觀念論であると言ひ得る。それ故に、認識の対象は、先験的觀念論にとつては、内在的にも超越的にも「与へられ」ずして、課せられているのである²⁶⁾。

つまり、「認識の対象」は「物自体」のような何ものかに与えられるのではなく、「Sollen」として「課せられて」いるのである²⁷⁾。ここでは、「物自体」という形而上学的要素は徹底して排除されている。官学アカデミズムはこの新カント派認識論の影響下にあり²⁸⁾、それに反感をもつ形而上学の支持者が、カントの『純粹理性批判』を集中的に攻撃するのは自然な流れであつたらう。そこで、対抗馬として見出されたのがベルクソンの哲学だつたわけである²⁹⁾。こうした事情に加えて、大正期初めのベルクソン受容の担い手に官学アカデミズムの正嫡が少なかったことも、その敵対傾向に拍車をかけることになった³⁰⁾。

以上のような背景から、ベルクソン派はカントや新カント派を退けてベルクソンの優位を強調するのであるが、ベルクソンの大流行の衰滅後、新カント派は大正教養主義という形で再び主流派に返り咲くことになる。結局、大流行は足かけ四年で終わってしまうのであるが、それではその衰退の原因はいったい何であつたのだろうか。それは、ベルクソン派の解釈の

方法に由来するものではなかったであろうか³¹⁾。以下に、ベルクソン派の解釈の特徴を剔抉することによって、流行衰退の原因を明らかにすることにしたい。

先に指摘したように、ベルクソンの解説書はいずれも「持続」、「直観」、「創造」を取り上げて紹介している。たとえば、中沢によると「深い自我」(p.38)である「实在即ち持続は絶対不可分で分析の加斧を許さない」(p.116)ものであるから、「直観に依て(中略)实在の内奥に入り、持続の生命を生きねばならぬ」(p.225)と言う。さらに、その「持続」は自発的に「創造」し、「進化」するものだと言うのである。

实在は持続である。生命の背後には常に潑刺たる生の衝動が働き、過去の上に過去が重なり、不断の創造が行はれて、其流れは無限に増成して行く。要するに生命は進化の過程にある。(p.170)

伊達もまた「生命」や「持続」を把握するには、「生命流動の内部に滲入して(中略)同感的に之を捕捉し得る本能の直観あるのみ」(p.34f)であり、その「直観」によって「刻々進化して暫くも停滞せざる生の流転」(p.38)である「全我」(p.38)に入ることができると言う。野村隈畔も「全体的個性」(p.66)である「实在そのものは不断の変化であり、不断の流動である。そこに純粹持続(pure duration)があり創造があり自由がある」(p.82)とし、この「持続」は「直覚」(p.85)によってのみ体得しうると述べている。

これらの解説書は、「直観」によって〈真の自我〉である「持続」に身を置くことができること(『試論』)、「持続」は「創造」し「進化」するものであること(『創造的進化』)を説く点で共通している。だが、これはベルクソン哲学総体の解説としては均整を欠いたものである。なぜならば、そこには『物質と記憶』に関する記述が圧倒的に少ないからである。しかも、ベルクソン哲学の解説書でありながら、『物質と記憶』に触れないものすらあった³²⁾。

そもそも、西田のベルクソン論にも、「物質」に関する記述は、「持続」が「物質」にも「精神」にもなりうるというわずか数行しかなかった。しかも、これは「哲学入門」の記載をそのまま写したものと考えられるのである³³⁾。

なぜ、『物質と記憶』は敬遠されたのであろうか。実は、ベルクソン派には避けなければならない理由があった。だが、『物質と記憶』を回避したのために、ベルクソンの大流行は結果的に衰退に向かうことになるのである。

3. ベルクソンの大流行の終焉

『物質と記憶』はベルクソン派にとってパンドラの匣と言うべきものであった。と言うのも、『物質と記憶』の解釈に関しては、ベルクソン派は完全に足並みを乱しているからである。それは、「イマージュ」の解釈においてとりわけ顕著であった。

たとえば、伊達源一郎は「イマージュ」(＝「形像」)について「所謂形像の客観的實在に

就ては、最早疑を容るべからず」(p.126)として、「形像は官能に受容せらるゝ前には、物的形像として存在し、感覺せられ、知覚せらるゝときは、心的形像となる」(p.127)と述べている。つまり、伊達は「形像」を客観的に存在する「実在」と見て、それが感覺に与えられて知覚されるのだとして、『物質と記憶』に素朴実在論を見出しているのである。

これに対して、中沢臨川は『物質と記憶』の解説で、「イマージュ」という語をそのまま「意識」に置き換えて、「意識は、何処までも生物のあらん限り、「自然」の中に存在する」(p.147)として、その「意識が物質を征服」(p.153)するのだと述べている。中沢は汎意識を根底に置いて、『物質と記憶』に唯心論を見出しているのである。

なぜ、同じ「イマージュ」をめぐる、ベルクソン派の立場が唯心論と実在論に分かれているのか。それは、「イマージュ」が「観念論者が観念と呼ぶもの以上ではあるが、しかし、実在論者が「物」と呼ぶもの以下のある存在³⁴⁾という、「精神」とも「物質」とも読み取りうる複雑な概念であったことに起因する。つまり、「物質」に引き寄せて解釈すれば実在論となり、「精神」に引き寄せれば唯心論になるのである³⁵⁾。だが、それはどちらも「イマージュ」をどちらかの極限からしか捉えていないのであり、これでは「精神」と「物質」を一元的に論じることはできない。

そこで、伊達は結局『物質と記憶』は二元論に終始しており、「身心結合問題」を解決してはいないと述べている(p.151)。つまり、ベルクソンは『物質と記憶』で、「持続」の一元論に「物質」を混ぜて、二元論に分裂させてしまったと言うのである。これを解決するには、中沢のように唯心論の立場をとって、意識を超えた汎意識から世界を捉えるしかないということになったのであろう。そうすれば、すべては一元論として収まるように見える。

そもそも、ベルクソン派は「持続」を「全我」(伊達、p.38)や「深い自我」(中沢、p.38)と言い換えていることから分かるように、ベルクソン哲学を唯心論的に解釈する傾向が強かった³⁶⁾。中沢は、『創造的進化』は「精神的・一元論」を説いたもので、「精神乃至意識が唯一本然の実在で、物質はその一部が分れて変態したものに過ぎない」(p.162)と述べている。だが、「物質」を精神に縮減するのでは、非空間の「持続」から空間に存在する「物質」がどのように発生するか、「持続」がいかにして「物質」の形で存在するかを説くことは難しいだろう。しかも、これでは『創造的進化』の「生命」が「物質」を変化させながら、いかにして「進化」していったかを説くことも困難になるはずである。

しかし、結局ベルクソン派にとっては、「物質」を扱った『物質と記憶』は、『試論』から『創造的進化』に至る「持続」の唯心論の調和を掻き乱すものでしかなく³⁷⁾、「観念論と実在論が物質をその現象と存在に分けたそれ以前の物質³⁸⁾」を問題とする『物質と記憶』の核心を掴むことは、ついにできなかった³⁹⁾。そして、この「物質」の問題を回避したことがベルクソン流行衰退の直接の原因となったのである。

1915-1916年には、ベルクソンの大流行にも翳りが見えはじめるが⁴⁰⁾、その契機となった

のはラッセルのベルクソン批判「ベルクソンの哲学」⁴¹⁾の紹介である。野村隈畔は「ベルクソン哲学の迷妄」(『六合雑誌』1916・1)で「ベルクソンの哲学」を紹介して、ラッセルの「イマージュ」(image = 「形像」)批判を次のように取り上げている。

ベルクソンが『表象』よりも具体的で、『物』よりも流動的な存在であるとする「形像」は、ラッセルによると「『表象』と物質とを混溶したもの」にすぎないと言う。すなわち、ベルクソンは「知る所の作用」=認識作用と、「知らるゝ物」=現実に存在する物質を等しいものと見ており、「精神と物質とを混同し」ていると言うのである⁴²⁾。

高橋里美も「ラッセルのベルクソン哲学批評」(『法華』1915・2)でラッセルを紹介して、「精神」と「物質」の混同を批判している。ラッセルの批判に従えば、ベルクソンは「精神」で捉えたものはすべて「物質」として存在すると述べていることになり、たとえ想像物のカメラであろうと、現実に存在することになってしまう。つまり、ラッセルは、ベルクソンの「イマージュ」を認識対象であると同時に、「實在」するものと解釈したのである。

しかし、そもそもベルクソンは〈統覚〉といった形式的な基点を置く代わりに、

我々が誰でも内から、単なる分析によらず直観によつて把握する事象 (réalité) が少なくとも一つある。それは時間を通じて流れてゆく我々の人格である。持続する我々固有の人格 (personne) である⁴³⁾。

と表現される「人格」を置いていた⁴⁴⁾。この「人格」は、反省的な「自己認識」(connaissance de soi)と同じものではなく、「直観」(intuition)や「内省」(introspection)と一致するものである。すなわち、「自身そのものと同感する (sympathisons)」⁴⁵⁾ことで導かれるものであり、「自身」の「認識」から導いたものではない。そこでは、意識は「持続」が与えられる場でしかないのである。

P・スレーズはラッセルが「イマージュ」を認識対象と捉えて、「直観」と切り離れたことを批判し、「ベルクソンは単数性ではかるわれわれの人格の認識を語っていたのではない。完全な自我に、原理的にそれが持続するままに近づく直観について語っているのだ」⁴⁶⁾と述べている。『物質と記憶』では、この「持続するまま」の「人格」から、「イマージュ」が「精神」と「物質」に切り分けられてゆくのである。そこには〈統覚〉としての非時間的な認識の基点は想定されていない⁴⁷⁾。

あらゆる知覚はある程度の持続の厚みを占め、過去を現在へと継承し、したがって記憶を介入させている。こうして知覚を具体的な形で純粹記憶と純粹知覚、すなわち精神と物質の総合として捉えることによって、私たちは心物統合 (l'union de l'âme au corps) の問題をぎりぎりのところで押し詰めた⁴⁸⁾。

すなわち、「精神」と「物質」は「人格」の「持続の厚み」によって時間的に区別される様態であり、この区別がある限り、「精神」が捉えたものはすべてがそのまま「物質」として存在するということにはならない。ベルクソンは『物質と記憶』で、“認識の基点としての

〈自我〉”というカントの認識論の枠組から出ない構図に対して、認識の基点に「時間」を介在させることで、カントが排除した「物質」を引き入れようとしたのである⁴⁹⁾。

しかし、ベルクソン派は「物質」を排除した唯心論の立場をとっていたので、認識の基点としての〈自我〉にこだわり、「心物統合」を果たせず、結果的にラッセルと同じく、『物質と記憶』に矛盾しか見出すことができなかつた。高橋は「ラッセルのベルクソン哲学批評」で、ベルクソン哲学に「主客の区別の欠けているのは彼が結局唯心論者であるから」だと批判したが、それはベルクソンよりベルクソン派に向けるのにふさわしい批判であつた。なぜならば、ベルクソン派はまさに「物質」を回避した「唯心論者」であつたからである⁵⁰⁾。

それでも、ベルクソン派はラッセルの批判を乗り越えてゆかなくてはならず、そこで空間を持たない「持続」から、いかにして現実存在する「物質」が発生するかという問いに答えなければならなくなつた。だが、この「物質」の問いはすぐには答えが出ず、結局論議は唯物論全盛の1920年代にまで持ち越されることになる。つまり後世から見れば、のちのマルクス主義隆盛の淵源はベルクソンの大流行にたどることができるのである。

また、ベルクソンの大流行は、マルクス主義が得意とした社会論の領域をも同時に開いていた。大流行の衰退後、ベルクソン派は「物質」を問うことより、社会論に新たな可能性を見出していったが、それは現実存在する〈他者〉の問題は、唯心論を脅かすという点において「物質」の問題と等価であつたからに他ならない。そこでベルクソン派は、西田がベルクソン論で触れなかつた「実践的問題」に、各々が取り組んでゆかなければならなくなつた。こうして、ベルクソンの大流行はさまざまな方向に分かれ、新たな流れの中に発展的に解消していったのである。

4. ベルクソンの大流行を越えて

ベルクソンの大流行は、ラッセルの批判が紹介されてから急速に衰退してゆく。1916年に、稲毛詛風は「我が哲学界の新傾向」で次のように述べている⁵¹⁾。

我が哲学界は、この数年の間に、オイケン、ベルクソン、タゴールと、瞬く間に、流行から流行に移り、また倏ちの間に、その流行が過ぎて仕舞つたために哲学に対する一般の興味と信用とがかなり失墜したかの感があつたが、最近に至つてまたもや哲学的興味は新らしく萌し初め、更に第四の流行を形造らうとさへしつゝあるのは、たしかに一個の注目事ではなくてはならない、そして其の流行の中心となるものは、いふまでもなくウィンドルバント、リッケルトを主領とする西南独逸学派の哲学である。

1916年前後の思想界の興味は、オイケン、ベルクソン、タゴールといった「存在」(Sein)を説く形而上学から、「当為」(Sollen)を説く新カント派にしだいに移りつつあつた⁵²⁾。ベルクソンのような形而上学からは「物質」が発生する仕組みを説くことはできないし、ひい

ては現実存在する〈他者〉との関わりも論じることができないという失望から、「価値」や「文化」、「歴史」を論じる新カント派が注目を集めるようになったのである。

しかし、論壇全体の関心が新カント派にすべて集まったわけではない。そもそも、新カント派はアカデミズムに歓迎されて、戦後まで続く大正教養主義の母体にもなったものの、「物質」や〈他者〉を直接問うものではなく、またその独特の難解さもあって大正期の論壇全体を支配するまでには至らなかった。論壇では、依然として形而上学の人気が高く、ベルクソン派の多くは、形而上学を修正して社会論に応用することによって、新たな道を模索していたのである。それが、大杉栄のサンディカリズムであり、野村隈畔の恋愛論であった。

また、西田幾多郎の自覚論も、ベルクソンと新カント派の折衷を目指し、形而上学の修正によってベルクソン哲学の乗り越えを図ったものである。以下に、これらの模索の内実と、その後の思想界に与えた影響を考察し、ベルクソンの大流行を追った本稿を閉じることにしたい。

野村はラッセルに依拠して、ベルクソンは意識と存在の二元論を統合できなかったと批判したが、「永遠の生命の活動を、奔放に自由に顕現せんとする時代の悩みは、今やその最高潮に達してゐる」⁵³⁾のであり、これを解決するには、意識にとどまる「自我」を超えて存在そのものになるしかないと主張した。野村はそこで意識を超える作用に注目した。それが、唯心論を超えて〈他者〉と一体化する「愛」だったのである。

吾々の生活乃至文化の広い範囲においてたゞ『愛』といふものゝ外に、もつと具体的で総合的でそしてもつと直接的燃焼的な根本意識はないと信ずる。(中略)愛は実に人類の普遍的体験である⁵⁴⁾。

野村はさらに男女の「愛」を人間の共同体の基礎に置き、社会を変える起爆力になるものと考えた。「愛」によって男女が融合する時に、個別の〈自我〉は消滅して、意識と存在の乖離は解消し、分裂した社会を根底から変える力がそこから得られると言うのである。

この社会論に連繫した恋愛論は、野村独創のものではなく、大正期に広く流布したものであり⁵⁵⁾、のちの昭和期のアナキズム運動に継承されることになる。だが、男女の「愛」の理想は存在の消滅にある、として心中礼讃の声がしだいに高くなり⁵⁶⁾、また昭和期のアナキズムがマルクス主義の隆盛の前に急速に衰退していったこともあって、恋愛論は社会論としてはあまり発展を見なかった。

これに対して、大杉栄は野村以上にベルクソン哲学を社会論に引き寄せて解釈した⁵⁷⁾。大杉はソレルを経由して、ベルクソンの「創造」とサンディカリズムを接合させたが、ソレルはベルクソン哲学を社会論に生かすことで、「マルクス派社会主義者の殆んど棄てて顧みなかった、主観の価値を力説した。人間そのものの尊貴を高調」したのだと言う。大杉は「純粹持続の中のみ生きてゐる、本当の自我」の「創造」性に注目して、この「本当の自我」を抑圧しない社会を作り出す必要があると主張したのである。

しかしこれについては、左右田喜一郎が新カント派の立場から、ベルクソンの哲学は「Sein」を説くのみで「Sollen」を説かず、個人が従うべき「窮極の判定の標準」を欠いており、したがってサンディカリズムは暴力破壊を肯定し、権力におもねる可能性があるとして批判した⁵⁸⁾。大杉の言う「本当の自我」の発揚は、そもそも社会進化論の立場をとっており、なによりも「創造」を優先させるものであったが、たしかに左右田が批判するように、「判定の標準」を欠くために暴力の肯定に至る可能性がないとは言えない⁵⁹⁾。この時期、実際にベルクソンの「創造」論が戦争を肯定する言説に援用されることもあった。

中沢臨川はベルクソンの第一次世界大戦についての講演「戦争の意味」⁶⁰⁾を紹介して、講演の「結論」を次のようにまとめている。

戦争の代価が何れだけ払はれようと、若しそのために人類が遂に今日の逆夢から解放されるならば、それは決して高価ではない⁶¹⁾。

中沢はそもそも「戦争の偉大なる力と価値」⁶²⁾に注目しており⁶³⁾、ベルクソンの講演も、人類の進化のためには戦争の犠牲が必要であると述べたものと解釈したのである。ベルクソンの講演の「結論」部分については、勢多左武郎も次のように紹介している。すなわち、ドイツの物質主義の退廃に対して、「精神は物質の圧迫と戦闘をつづけねばならぬ、生命は朽ちゆく力を破碎せずして進むことは不可能でなければならぬ、偉大なる道徳的の結果は多くの血と涙とによつて贖はれねばならぬ」⁶⁴⁾と。

勢多の紹介でも、「ねばならぬ」の多用から、生命の進化には戦争が必要だとベルクソンが主張しているかのように読み取ることができる⁶⁵⁾。だが実際には、ベルクソンは「精神は物質の抵抗と衝突するものであること、生命は生者を打ちのめさずにはけっして前進しないこと、そして偉大な道徳的成果は多くの血と涙と引き換えることを余儀なくされている」⁶⁶⁾として、戦争を「生命の跳躍」(élan vital)の見地から語りはしたものの、講演の主旨を好戦論には置いていなかったのである⁶⁷⁾。

つまり中沢の解釈は、「生命」の発揚のためには〈他者〉を犠牲にしても良いことになってしまうという、社会進化論の弱点を期せずして露呈したものだだったのである。また、それはまさに、同じく〈他者〉の存在の問いを回避した、ベルクソン派の唯心論の弱点をそのまま継承したのもでもあった。

社会進化論が〈他者〉を排除する可能性については、〈他者〉としての民衆やプロレタリアートの問題が浮上する1920年代に、とりわけ問題視されるようになるが、ベルクソン哲学と〈他者〉を抑圧する社会進化論の結びつきに修正が加えられるには、『道徳と宗教の二源泉』(1932)の登場まで待たなければならなかった。

以上は、ベルクソンの形而上学を社会論に応用したものであるが、恋愛論もサンディカリズムも、当時の自我論隆盛の思潮と相俟って論壇で華々しく迎えられた。ただし、それは大正期に限ってのことで、昭和期の1920年代半ばからの唯物論の隆盛の前では、あまり勢い

は振るわなかった。だが、ベルクソン派の流れがそこで完全に途絶えたわけではなく、ベルクソン哲学の研究は潜勢的にはあるがその後も根強く続けられている。そこで、もっとも貢献したのは、昭和期にも引き続いて論壇に影響を与えた西田の模索であった。

それでは最後に、西田のベルクソン論以降の模索を検討することにしよう。それは、新カント派との対決から始まったが、もともと西田は1910年の段階では、新カント派はベルクソン哲学に類似したものと捉えていたようである。「ベルクソンの哲学的方法論」の一節には、

氏（＝ベルクソン、引用者註）の思想の傾向をいへば（中略）我々の精神生活の内には自然法以上の創造的作用がある、我々に直截な実在界は却つて此意志活動の世界であつて知識の対象の世界ではない、自然科学の説明は実在の表面的説明にすぎないといふ現今の思潮に属するのである。此の思想は独国に於てはフィヒテをかつぎ出し認識論を価値の哲学に変ぜんとする一派の人々例へばウィンデルバント、リッケルト、ミュンステルベルヒ等の如き人々に由つて現はれ、英米に於ては例のプラグマチズムに由つて現はされて居る（中略）。以上の人々の中でもベルクソンは特に深く哲学に入つてをるやうに思はれるのである。

とあり、西田はここで、プラグマティズムと新カント派とベルクソンを思想的に類似したものと捉えている。だが、そもそも『善の研究』の「純粹経験」は「意味」と「事実」を同時に含むものであり、つまり「純粹経験」には、世界を意味づける行為（認識作用）も事実（指示対象の現実存在）も同時に備わっていた。したがってこの立場からは、事実そのものを論じる形而上学と、意味を論じる価値論を分ける必要はなかったのである⁶⁸⁾。

しかし、西田は早くも「認識論に於ける純論理派の主張に就て」（『芸文』1911・8）では、形而上学派と新カント派を切り離している。そこで、西田はリッケルトやフッサールを紹介して、彼らの言う「意味 Sinn」は「有 Sein の範囲に属せぬことは明か」だとはっきり述べている。そして、「意味 Sinn」とは「価値 Wert」の範囲に属するもので、「乃ち外、超越的実在界に属せず、内、意識内容に属せず、全然知的作用を超越せる客観的価値界といふものが建設せられてこれによつて知識の客観性が与へられる」ものだと言う。ただし、西田はこの時は新カント派に対しては、「知情意未分以前経験」を排除する新カント派は「余りに独断的」だと批判している。だが、西田は新カント派を全否定したわけではなく、その後ベルクソンの形而上学と新カント派の価値論の綜合に重点を置くようになる。『思索と体験』（千章館、1915）の「序」で、西田はこの二つの綜合が今後の課題だと述べていた⁶⁹⁾。その成果となったのが、『自覚に於ける直観と反省』（岩波書店、1917）である。

西田はそこで、「余の所謂自覚的体系の形式に依つて」、「現今のカント学派とベルクソンとを深き根柢から結合する」⁷⁰⁾ことを目指したと述べている。すなわち、ベルクソンの「直観」と新カント派の「反省」を綜合するのが「自覚」だと言うのである。

『自覚に於ける直観と反省』は、やはり〈自己〉を捉えることから始めている。〈自己〉を反省的に捉えても、捉えつつある〈自己〉は、反省された〈自己〉に含まれない。そこで、事実と意味の乖離が生じるが、そもそも〈自己〉を反省的に捉えることは「英国に居て完全なる英国の地図を写す」⁷¹⁾ ようなものだと言う。だが、〈自己〉の「自覚」を無限に反復し、「動的発展」する行為によってしか、事実と意味は生まれない⁷²⁾。また逆に言えば、事実と意味を生むものこそ、この「自覚」なのである。

「純粹経験」において強調されていた私と世界との直接的な一体性が、「自覚」として、より強いかたちで「実践性」と置き換わる。というのも「自覚」とは、「行為」のなかで世界と一体化している私が、その「行為」そのものにおいて、自己を「限定」していく「働き」のことだからである⁷³⁾。

こうして、西田は「自覚」の「実践」によって、『善の研究』や二つのベルクソン論では保留にしていた「実践的問題」に対して、解決策を示すことができた。だが、「自覚」という解答も、1920年代になって勢力を延ばした唯物論の立場から見れば、観念論的なものでしかないという批判が出てくる⁷⁴⁾。そこで、西田は「場所」(『哲学研究』1926・6)で、「自覚」が一般が個別を包む限定の動きであることに注目し、包むところに「於いてある」「場所」を重視し、「場所」から、ひいては「無」からの世界観を構築してゆく⁷⁵⁾。そこには、「自覚」にはまだあった、『善の研究』以来の〈自我〉の内潜という方法は後景に退いているのである。

以上、ベルクソン受容の濫觴期をたどってきたが、そこで、その後の思想界の争点の多くがすでに現れていたことに改めて注目したい。大正期には、自我論が思想界を席卷したが、この自我論が実は唯心論的なものであり、ここでは「物質」や〈他者〉の問題を扱えないという限界があることを示したのは、ベルクソン哲学の大流行であった。西田もほぼ並行してベルクソンを経て、唯心論の限界に辿り着くことになる。

ベルクソンの大流行以後、形而上学とカントの認識論の再検討が図られて、新カント派の研究も精緻化し、新カント派を内部から乗り越えるフッサールやハイデガーの紹介も行われるようになった⁷⁶⁾。これらは、言わば唯心論の閉塞を打ち破ろうとする試みだったのである。また、1920年代からは、唯心論と真っ向から衝突する唯物論が思想界で隆盛を極めるようになるが、これもベルクソンの大流行で唯心論の限界が示されていなければ、アナキズムを駆逐するほどの勢力は得られなかったかもしれない。

大正期の初めに思想界を席卷したベルクソンの大流行は、その後の日本の思想界の歩みを左右することになった一つの思想的〈事件〉だったのである。

註

- 1) 本論では、文壇とベルクソンの関係は取り上げないが、文壇における生命主義の影響に関し

- ては、鈴木貞美『「生命」で読む日本近代一大正生命主義の誕生と展開』（NHK出版、1996）が詳しい。その他、安川定男「有島武郎とベルクソン」（『有島武郎研究叢書』第9集、右文書院、1996）、拙稿「有島武郎とベルクソン受容」（『成城国文学』1999・3）、伊藤里和『「ドグラ・マグラ」論—二つの時間』（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』2002・3）、山崎行太郎『小林秀雄とベルクソン—「感想」を読む』（彩流社、1997）、拙稿『「感想」とメルロ＝ポンティ—小林秀雄の蔵書から』（『成城国文学』2004・3）などがある。
- 2) 新渡戸稲造『東西相触れて』（実業之日本社、1928）にはベルクソンとの交流記「哲人ベルグソン氏」が収められている。新渡戸のように間接的な影響を受けた文化人も数多い。
 - 3) 坂田徳男は「私の回想のうちのベルグソン」（坂田徳男、澤瀉久敬編『ベルグソン研究』勁草書房、1961）で「明治の末から大正の初めにかけての時期に相当した私の中学時代に我が思想界に盛名をうたわれた人々はベルグソン、タゴール、オイケンに止めをさした。知識人という知識人がこの三人の名を口にした」と往時のベルクソン流行を追懐している。
 - 4) 吉田熊次「教育上より見たる独仏大学に於ける哲学研究の概況」（『哲学雑誌』1908・3）吉田は「ベルグソンの哲学と教育との交渉」（『哲学雑誌』1926・6）で、1907年にコレージュ・ド・フランスでベルクソンのスペンサーに関する講演を聴講したと記している。
 - 5) 西田幾多郎「ベルグソンの哲学的的方法論」『芸文』1910・8。なお、この論文は『思索と体験』（千草館、1915）に収められたが、『思索と体験』（岩波書店、1919）の増訂版（1922）で、内容が一部削除ないし変更された。本論は変更前の初出文に拠っている。
 - 6) 西田幾多郎「ベルクソンの純粹持続」『教育学術界』1911・11（初出文に拠る）
 - 7) 『思索と体験』増訂版以降削除されたが、初出には「Introduction à la métaphysique の独訳」によって紹介するという断り書きがあった。「フランス哲学についての感想」（『思想』1937・1）には、「最初にベルグソンの精神を掴んだのは、独訳の Einführung in die Metaphysik であつた」との回想文がある。
 - 8) Henri Bergson, "Introduction à la métaphysique", dans *La pensée et le mouvant*, Œuvres, PUF, 1959, p. 1392.
 - 9) 『思索と体験』の初版（岩波書店、1919）に収録の際、「継続」は「持続」に改められている。「ベルグソンの純粹持続」では、初めから *durée* を「持続」としている。
 - 10) ここは『物質と記憶』第4章、『創造的進化』第3章を想起させるが、「物質」に関する記述はこの一行のみであり、西田は「哲学入門」の「持続」が「拡散」して「物質」となり、「緊張」して「生命の永遠」となるという記述（Bergson, "Introduction à la métaphysique", op. cit., p. 1419.）をそのまま引用したのであろう。
 - 11) 『物質と記憶』の第3章までは「物質」と「精神」の二元論が語られるが、第4章で「持続」による一元化が計られる。そこで、「持続」による一元論の系譜として『試論』、『物質と記憶』第4章、『創造的進化』の連続性を見て取ることができるが、『物質と記憶』の「持続」は『試論』の時のように「物質」を排除しない。したがって、『物質と記憶』は『試論』、『創造的進化』とは非連続だという指摘もある（註37参照）。西田はそこに連続性を見ているが、当時の西田は「物質」の問題にこだわらず、「物質」も唯心論的に処理しようと考えていた節があり（『善の研究』で「無機物」は「実在」の現象として処理されている。註13）、14）参照）、だからこそ「物質」の問題は「哲学入門」のわずかな記述に依拠するだけで済ませたのであろう。西田の理解とは異なるが、楡垣立哉『ベルクソンの哲学—生成する実在の肯定』（勁草書房、2000、pp.153-167）、岩田文昭『フランス・スピリチュアリズムの宗教哲学』（創文社、2001、pp.

- 88-94) は連続性を見ている。
- 12) 『善の研究』でベルクソンの名は登場しないが、『善の研究』の準備ノート「純粹経験に関する断章」(『西田幾多郎全集』第16巻、岩波書店、1966)の「断片三二」で、西田はベルクソンの名と共に、質的で流動的な直接経験、持続、記憶などに触れている。「Introduction」(「哲学入門」)の名も挙がっている。
- 13) 「純粹経験に於ては未だ知情意の分離なく、唯一の活動である様に、又未だ主観客観の対立もない。主観客観の対立は我々の思惟の要求より出でるので、直接経験の事実ではない。直接経験の上に於ては唯独立自全の一事実あるのみである、見る主観もなければ見らるゝ客観もない。恰も我々が美妙なる音楽に心を奪はれ、物我相忘れ、天地唯囀鳴たる一楽声のみなるが如く、此刹那所謂真実在が現前して居る」西田幾多郎『善の研究』『西田幾多郎全集』第1巻、岩波書店、1965、p. 59f.
- 14) 「今日の進化論に於て無機物、植物、動物、人間といふ様に進化するといふのは、実在が漸々其隠れたる本質を現実として現はし来るのであるといふことができる。精神の発展に於て始めて実在成立の根本的性質が現はれてくるのである。ライプニッツのいつた様に発展 evolution は内展 involution である」西田『善の研究』前掲書、p. 92.
- 15) 西田『善の研究』前掲書、p. 102.
- 16) 高橋里美は「意識現象の事実とその意味—西田氏著『善の研究』を読む—」(『哲学雑誌』1912・3-4)で、西田の『善の研究』は「意識現象」の「事実」と「意味」を分けずに混同していると批判する。「意味はそれ自身非実在であるならば、いかにしてそれが事実と一致することができるか」、すなわち認識作用が現実存在にいかにして一致するかを、西田は説明していないと言う。認識作用と現実存在を「純粹経験」で混同する限りは、観念論から出ることはできず、認識作用が現実存在にいかにして一致するかを説くことはできない。したがって、『善の研究』でいくら観念的な普遍「善」を取り上げても、「純粹経験」が「物質」や現実存在する人間とどのように対峙するかという「実際の方面」は説くことはできない、と高橋は批判している。
- 17) ベルクソンは「哲学入門」(1903)を『思想と動くもの』(1934)に収録する際、この論文は「分析的方法」と「直観的方法」が「互いに助け合わなければならない」ことを示したものと脚注に記している(Bergson, "Introduction à la métaphysique", op. cit., p. 1392f). しかし、淡野安太郎『ベルグソン』(勁草書房、1958、p. 44f)が指摘するように、これは晩年のベルクソンの考えで、発表当時は両者を「根本的に異なる方法」としており、「直観的方法」が明らかに優位に立っていた。この「哲学入門」に拠った西田も「分析的方法」、すなわち「物質」の方法の主張にはまだ重きを置いていなかった。
- 18) 邦訳は『創造的進化』(金子馬治・桂井当之助訳、早稲田大学出版部、1913)、『物質と記憶』(高橋里美訳、星文館、1914)が刊行されている。また、ベルクソンが自らの哲学を解説した「哲学入門」の翻訳も、『ベルグソンの哲学』(錦田義富訳、警醒社、1913)と題して刊行されている。ドイツや英米でも、この時期ベルクソン哲学に注目が集まっており、以下のように主著の翻訳が刊行されている(訳者と出版社は略す)。『試論』独訳、*Zeit und Freiheit*, 1911. 英訳、*Time and Free Will*, 1910. 『物質と記憶』独訳、*Materie und Gedächtnis*, 1908. 英訳、*Matter and Memory*, 1911. 『創造的進化』独訳、*Schöpferische Entwicklung*, 1912. 英訳、*Creative Evolution*, 1911. 「哲学入門」独訳、*Einführung in die Metaphysik*, 1909. 英訳、*An introduction to Metaphysics*, 1912. 当時の日本では、ベルクソン哲学の翻訳書や解説書の多くがこの独訳、英訳に依っていた。しかし、伊達源一郎はこの状況を批判して、「若夫れ英訳若くは独訳を重訳するものに至りては、最早ベルグソンを

- 殺した」(p.351)ものだと述べている。
- 19) 解説書には、稲毛詛風・市川虚三『ベルグソン哲学の真髓』(大同館、1914)もあるが、これの主要部分はEdouard Le Roy, *Une philosophie nouvelle, Henri Bergson*, Alcan, 1912. の抄訳なので除外した。なお、ル・ロワのこの書には英訳があり(*New philosophy Henri Bergson*, trans. by Vincent Benson, William & Norgate, 1913)、日本のベルクソン解説書の多くが依拠している。日本のベルクソン受容とル・ロワの関係については別稿を期したい。
- 20) 雑誌論文の一部を発表順に挙げておく。【1911年】小山鞆絵「ベルグソンの「時間と自由意志」」『哲学雑誌』(以下『哲』)11-1(数字は刊行月、以下同)、【1912年】高島平三郎「ロダンとベルグソン」『丁西倫理会倫理講演集』(以下『丁』)1-2、鷺尾正五郎「ベルグソンの「虚無」の批評につきて」『哲』6、内藤濯「ベルグソンと近代詩」『六合雑誌』(以下『六』)9、内ヶ崎作三郎「ベルグソン哲学と基督教」『六』9、三並良「ベルグソンと独乙哲学」『六』9、野村善兵衛(隈畔)「ベルグソンとニイチエ」『六』9-10、広瀬哲士「生の進化」『三田文学』(以下『三』)9、【1913年】広瀬哲士「ベルグソン哲学の中心思想」『三』2、福井晋太郎「ベルグソンとカント」『新人』2、米田庄一郎「革命的サンジカリズムと現代生活」『哲』3、福井晋太郎「ステワルト氏のベルグソン哲学批評」『哲』3-4、ヤコビイ「ベルグソン対ショーペンハワー」三並良訳、『六』3-4、大杉栄「創造的進化—アンリ・ベルグソン論—」『近代思想』4、中沢臨川「ジエームスよりベルグソンへ」『早稲田文学』5、ゆふしほ「米国人のベルグソン評」『六』5、広瀬哲士「ベルグソンへの近き道」『文章世界』6、中沢臨川「ベルグソン」『中央公論』6、広瀬哲士「知能と本能(ベルグソン)」『三』7、「ラブジョーイ教授の『ベルグソン哲学の实际的傾向』」『丁』7・9、鷺尾正五郎「ベルグソンの時と運動の批評につきて」『哲』8、金子馬治「ベルグソン哲学の大要」『教育実験界』9、前川真二郎「ベルグソンの哲学と基督教」『新人』10-11、【1914年】三宅雄二郎「ベルグソン哲学概評」『哲』1、得能文「ベルグソン哲学の背景及び实际的傾向」『哲』1、帆足理一郎「ベルグソンの創造的進化論(一)」『新人』4、島村嘉一「ベルグソンの哲学説梗概」『教育学術界』4、千葉命吉「創造的進化と女子の天職」『教育学術界』4、野村隈畔「カントよりベルグソンへ」『六』5、大島正徳「ベルグソン哲学の批評(特に「時間及自由意志」に就て)」『哲』9、ガストン・ラジオ「ベルグソンの哲学」中村星湖訳、『早稲田文学』9、大島正徳「ベルグソンの倫理的帰結」『丁』10、上野陽一「ベルグソンの『夢』」『教育学術界』10、高橋穰「ベルグソンの『物質と記憶』(高橋学士の訳を読む)」『哲』10-11、1915年以降、ベルクソン論は一気に減少する。
- 21) 山田横榔「大正三年に於ける評論壇」(『帝国文学』1915・1)には、「ベルグソンの思想」によって、「単なるリアリステイックな思想に飽きはてた我が思想界が、新しい理想主義と、主観的唯心思想とに、久しい間の渇きを癒さうとした」とある。藤田逸男も「思想界の哲学化」(『新人』1913・9)で「少しく以前までは「分析」といふ語は有らゆる方面に於ける問題の解剖者であり(中略)又実に真理の権威者であつた」が、今や「人生に於ける根本的要求」の聲が高まり、「形而上学」の時代になったと述べている。また、九鬼周造は“Bergson au Japon”, dans *Les nouvelles littéraires*, 15 décembre 1928. (『九鬼周造全集』第1巻、岩波書店、1981)で、ベルクソン哲学が到来した時の状況を次のように回想している。「ドイツの新カント派の批判的形式主義(le formalisme critique)によってすっかり乾涸びてしまった我々の精神は、ベルクソンの形而上学的直観という「天恵の慈雨」を迎え入れた」。
- 22) 船山『大正哲学史研究』法律文化社、1965(引用は『船山信一著作集』第7巻、こぶし書房、1999、p.188)

- 23) 船山『大正哲学史研究』前掲書、p.26.
- 24) 西田幾多郎は「認識論における純論理派の主張について」(『芸文』1911・8)で、純論理派(新カント派)の立場は「主観的認識作用を超越した客観的対象があるといふこと及び何らかの仕方においてこれを知り得るといふことは最初から問題にならぬ」とするものだと述べている。新カント派は井ンデルバンド『哲学史要』(桑木巖翼抄訳、早稲田大学出版部、1902)などを通じて、日本のアカデミズムにカントの認識論を浸透させる大きな役割を担った。ただし、さまざまな立場の哲学者を擁している新カント派を、形而上学の否定と認識論の徹底の面だけで見るのでは単純化の誇りを免れず、西田も新カント派に対する見解をのちに大幅に改めている(本稿4章で詳述する)。論壇でも、新カント派の哲学者それぞれの思想の内実が細かく論じられるようになるのは1915年前後からである。
- 25) Heinrich Rickert, *Der Gegenstand der Erkenntnis: Einführung in die Transzendental-philosophie*, J. C. B. Mohr, 2 Aufl., 1904. 邦訳『認識の対象』山内得立訳、岩波書店、1916(引用は岩波文庫版、1927、p.142)
- 26) Ibid., 邦訳 p.192.
- 27) 「現今多くの人々は、純理論的に見て、すべて価値とは「主観的」なる心象にすぎないと考へ、しかも此概念のもとに価値の個人的経験的主観に対する依属性を理解せんとしてゐる」(Ibid., 邦訳 p.254)が、リッケルトのSollenは「経験的主観に対して超個人的無制約的「無上」命令として顕現する」(Ibid., 邦訳 p.255)、あくまで先験的なものである。
- 28) だからこそ、『哲学雑誌』などのアカデミズム系の雑誌には、福井晋太郎「ステワルト氏のベルクソン哲学批評」(『哲学雑誌』1913・3)、大島正徳「ベルクソン哲学の批評(特に「時間及自由意志」に就て)」(『哲学雑誌』1914・9)、高橋穰「ベルクソンの『物質と記憶』(高橋学士の訳を読む)」(『哲学雑誌』1914・10-11)のように、「持続」の接近には「直観」などは必要なく、ベルクソンが分析的だと否定する既存の認識論で十分対応できる、とカントの認識論を墨守したベルクソン批判が散見されるのである。
- 29) 戦前の日本の哲学界ではドイツ哲学の位置が圧倒的に高く、哲学や倫理学の講義で、フランス哲学が主題となることはきわめて少なかった。上田敏は「日本の智識界では、官府が保護し、社会が歓迎する方面には独逸風が行はれ、文芸のやうに一般の冷遇どころか、時として敵対を受ける方面には」「英仏露」といった「他の文化が慕はれてゐる」と述べている(『仏蘭西と独逸』『太陽』1914・10)。だが、このドイツ偏重の思想状況は1890年頃からのものである。1878年から1890年まで、東京帝大で哲学講義を担当していたのはアメリカ人のフェノロサであり、ヘーゲルやスペンサーの授業を行っていたが、モースの紹介で就任した事情もあり、哲学よりは美術や進化論で果たした功績が大きかった。ところが、1887年に、東京帝大の哲学講義の担当者としてドイツ人のカント研究者ブッセが来日してからは、日本の哲学界におけるドイツ哲学の影響力が強くなり、1892年のブッセ帰国後、ハルトマンの紹介で1893年にショーペンハウアーの研究者ケーベルが来日すると、その影響力は支配的なものとなった。1914年までの長きに互って教鞭をとりつづけたケーベルは、哲学の基礎教育の徹底を図り、ギリシャ哲学、中世神学、カント、ヘーゲルを講じた。ケーベルは、1909年7月の卒業生訓示で「あらゆる近世歐洲語のうちで哲学的思索に適した詩的表現に適する国語は実にたゞひとりドイツ語あるのみである」(「私の学生に(その二)」『ケーベル博士隨筆集』岩波書店、1957)と述べてドイツ語とドイツ哲学の優位を誇った。ケーベルが率いたアカデミズムでのドイツ哲学の位置は非常に高いものとなり、そこでベルクソンが官学アカデミズムに対抗しうる反カントのフランス哲学者

- として注目されたのである。なお、ベルクソン受容前夜となる1910年頃の官学アカデミズムの動き（認識論と国家道徳の密接な関係）とそれに対する抵抗の動きについては、拙稿「『修養』の系譜—自然主義前後の思想状況—」（『成城国文学』2001・3）で詳述した。
- 30) 中沢臨川は東京帝大工科大学電気部卒で技師となり、のちに文芸評論家となった。野村隈畔は小学校卒業後の学歴はなく、独学の在野の哲学研究者である。伊達源一郎は国民新聞社編集局長、読売新聞主筆を歴任した在野の研究者である。大正期初めのベルクソン受容は、東京帝国大学で哲学を専修していない、アカデミズムから距離のある人物が中心になっているという特徴がある。
- 31) ベルクソン流行の衰退の背景には、第一次世界大戦をめぐる日本の論壇の変化も大きく関わっている。本稿はベルクソン派の解釈の傾向から衰退の原因を探るものであり、論壇の変化については触れないが、それについては拙稿「純粹持続の効用——大正期ベルクソニズムと戦争」（『成城文芸』2000・2）を参看されたい。
- 32) たとえば、稲毛詛風『オイッケン、ベルグソン哲学講話』（早稲田文学社、1914）では、ベルクソン哲学の概要79-125頁のうち『物質と記憶』に触れる部分は94-100頁だけである。中沢臨川『ベルグソン』、伊達源一郎編『現代叢書 ベルクソン』も、『物質と記憶』の解説は多くても全体の六分の一程度でしかない。なお、野村隈畔『ベルグソンと現代思潮』、三浦哲郎『ベルグソンの哲学』には『物質と記憶』の解説はない。
- 33) 註10) 参照。
- 34) Henri Bergson, *Matière et Mémoire*, Œuvres, PUF, 1959, p. 161.
- 35) ベルクソンがここで言う「観念論」は、現象の知覚を軸にした経験論の立場を指すが（ここでは、存在は現象に縮減される）、ベルクソン派の唯心論はこの「観念論」とは異なり、現象が存在する根拠に「真の自我」を設定して、「真の自我」による一元論を説くものである。この唯心論は「真の自我」を権利上の存在とは見ずに実体化し、それを「生命」とも結び付けているので、一見したところ存在論であるが、そもそも「観念論」から導き出されたものであり、「自我」にこだわるところから分かるように認識論の影響が強い（認識は存在に縮減されない）。ところが、「仮の自我」と「真の自我」は時に区別がつかず、またその時間的、空間的区別も厳密ではないので、〈意味〉と〈事実〉は混同されて、そのために「物質」の問題を深く追求することはできなかつた。ベルクソン派の唯心論は観念論と实在論の曖昧な混合物であり、これが「イマージュ」をめぐる両極の立場に分かれたのは、そもそも自らの曖昧な二重性に起因していたのである。
- 36) 内藤濯「ベルグソンと近代詩」（『六合雑誌』1912・9）は「持続」を「最終究極の我」、「全我」としているが、この解釈は大正期に全盛を極めた唯心論的な自我論の影響を強く受けている。自我論は東洋哲学のとくに唯識論の「仮我」と「真我」の枠組みに通じることから広く人口に膾炙した。「東洋」にはもともと「ベルグソン以上」の哲学があるので、ベルクソンは必要ないという見解すら出ている（三宅雄二郎「ベルグソン哲学概評」『哲学雑誌』1914・1）。自我論が大正期にとりわけ隆盛したのは、「真我」を認めないアカデミズムの心理学や認識論への反発によるところが大きい。1910年の福来友吉の千里眼事件以来、アカデミズムの心理学はとくに科学主義に傾斜していった（佐藤達哉・溝口元編『通史 日本の心理学』北大路書房、1997、第2部）。
- 37) ジャンケレヴィッチによると、『試論』では「言語、空間、多種多様な社会的象徴表現」は「本物の自我を再び見出すために是非とも必要とあらば刈り込んでしまえばよい寄生植物であ

- ったが、『物質と記憶』では、「精神にとってもっとも危険な寄生者として告白されていた言語が、今や実在への適応とか行為への通路といった肯定的機能をまもって現れてくる」(Vladimir Jankélévitch, *Henri Bergson*, PUF, 1959, p. 117f. 邦訳『アンリ・ベルクソン』阿部一智、桑田禮彰訳、新評論、1988、p. 159) ようになった。『試論』は物質を排除項としてだけ見ていたが、『物質と記憶』は精神も物質も等しく扱っている。ベルクソンは『物質と記憶』第7版序文で、「この本は精神の *réalité* と物質の *réalité* を認め、両者の関係を記憶という特定の例によって明確にしようとするものである。したがって、明らかな二元論である」(Bergson, *Matière et Mémoire*, op. cit., p. 161) と述べている。この二元論の方法をとった『物質と記憶』は、「持続」の一元論の徹底を望むベルクソン派には混乱を招くものであった。そこで、ベルクソン派は『試論』と『創造的進化』の一元論を乱す『物質と記憶』の積極的な言及を避けたのである。ジャンケレヴィッチは次のように述べている。「どうして『創造的進化』は『物質と記憶』をとびこして『時間と自由』の結論と再び結びつくように思えるのか、ということを理解するのはたやすい。物質は、もはや『創造的進化』においては、『物質と記憶』においてそうであったほど〕はつきり過去の活性化という積極的な機能の中で現れるわけではないのだ」(Jankélévitch, op. cit., p. 169. 邦訳 p. 230)。(註 11) 参照)
- 38) Bergson, *Matière et Mémoire*, op. cit., p. 162.
- 39) 西宮藤朝は「ベルグソンの人物と批評」で、『物質と記憶』は「此書は前の『意識の直接与件論』の発展、といふよりも、それを他の問題に接触させて見たものと言ふべきである。即ち前著では物質や空間から意識を解放し、以て真の自我、真の持続を闡明することを目的として書かれたが、本書は前に獲得した持続を、再び物質に結び付けて見たのである」と述べている。これは、ベルグソン『哲学入門』(西宮藤朝訳、平凡社、1925)に付された一文であるが、『物質と記憶』が単独で評価されるようになったのは、唯物論の擡頭で新カント派や自我論の勢力が弱くなる 1920 年代からであった。
- 40) ベルクソンの「直観の神秘」の流行は、第一次世界大戦の「大乱に依つて一時阻止せられ、思想らしき思想問題は凡てが戦争の渦巻に打勝たれて其姿さへも潜めて仕舞つた」(快堂「大戦乱後の思想界」『新人』1915・4)。論壇は戦争を機に、しだいにベルクソンより国家主義か世界主義かという社会論に関心を向けるようになっていた。註 31) 参照。
- 41) Bertrand Russell, “The philosophy of Bergson”, in *The Monist*, July 1912. のちに、*A History of Western Philosophy*, Simon and Schuster, 1945, pp. 819-838. (邦訳『西洋哲学史 3』市井三郎訳、みすず書房、1970、pp. 783-802) に収録。
- 42) 「ベルクソンの念頭にある区別は、心的出来事としての形像作用 (imaging) と対象 (object) として形像された (imaged) 事物ではない。ベルクソンが考えているのは物そのもの (thing as it is) と現われた物 (thing as it appears) の区別である」(Russell, *ibid.*, p. 836. 邦訳 p. 800)。そして、ラッセルは、ベルクソンはこの区別を消去して観念・対象＝現実存在という異常な素朴実在論を説くものだとして理解している。
- 43) Bergson, “Introduction à la métaphysique”, op. cit., p. 1396.
- 44) 「ベルクソンは、直観の例として、自我の直観をあげている。そこでは、持続が自然的統一の姿で現れるというのである」(Maurice Merleau-Ponty, *L'union de l'âme et du corps chez Malebranche, Biran et Bergson*, notes prises au cours de Maurice Merleau-Ponty, recueillies et redigees par Jean Deprun, J. Vrin, 1968, p. 106. 邦訳『心身の合一』滝浦静雄・中村文郎・砂原陽一訳、朝日出版社、1981、p. 159)。したがって、この「自我」は統覚の類ではない。ちなみにメルロ＝ポンティは、ベルクソンは

- 「哲学入門」で「直観」を「意味の働きによって記号と事実を結びつける働き」として知性との統合を説いたが、『物質と記憶』では、直観は物との合致でしかなく、事実と意味の関係については曖昧な混同しか説いていないと批判している (Ibid., p. 113. 邦訳 p. 170)。メルロ＝ポンティの批判に従えば、『物質と記憶』には知性に関する言及が少なく、それが“事実と意味の混同”というラッセルの批判を招いたことになる。
- 45) Bergson, “Introduction à la métaphysique”, op. cit., p. 1396.
- 46) Philippe Soulez et Frédéric Worms, Bergson, PUF, 2002, p. 129. スーレーズは本書の pp. 124-131. でラッセルのベルクソン論を批判的に検討している。
- 47) ドゥルーズは、『物質と記憶』では「運動は物そのものに帰属させられ、その結果、物質的なものは直接に持続を分有して、持続の一つの極限のケースを作っている。『試論』は超越されている。運動は、自我の内部にも外側にも同じように存在する。そして、今度は自我そのものも、持続のなかでは、ほかのものと同じひとつのケースにすぎなくなる」(Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, PUF, 1966 (1998), p. 73. 邦訳『ベルクソンの哲学』宇波彰訳、法政大学出版局、1974、p. 81) と述べている。
- 48) Bergson, *Matière et Mémoire*, op. cit., p. 373.
- 49) Ibid., p. 162f.
- 50) 引用は『高橋里美全集』(第7巻、福村出版、1973)による。高橋は『物質と記憶』(星文館、1914)の「訳者序」でも、『物質と記憶』は「意識をもつて最も確実直接なる唯一の発足点とする」が「意識現象を物質とは全然相容れざる非延長的実在とするものではない」、「具体的唯心論」を説いたものと述べている。
- 51) 稲毛詛風「我が哲学界の新傾向」『早稲田文学』1916・6
- 52) たとえば、紀平正美『認識論』(岩波書店、1915)、リッケルト『認識の対象』(山内得立訳、岩波書店、1916)、淀野耀淳『認識論之根本問題』(日本学術普及会、1917)、桑木巖眞『カントと現代の哲学』(岩波書店、1917)と、カント、新カント派に関する書物が続々と刊行されて、マルクス主義が隆盛する大正末(1926)までこの傾向は続く。
- 53) 野村隈畔『自我を超えて』警醒社書店、1917、p. 189.
- 54) 野村隈畔『現代文化の哲学』大同館書店、1918、p. 446f.
- 55) 自由恋愛による男女の結末に、理想社会の原点を見る恋愛論は、大正期を通じて流布したが、アナキズムと結びつくことが多かった。恋愛論とは言え、エンゲルス『家族・私有財産及び国家の起源』、モルガン『古代社会』の群婚の記載などを典拠としており、社会論と密接に結びついている。有島武郎、大杉栄、高群逸枝らが中心となって恋愛論は人口に膾炙し、厨川白村の『近代の恋愛観』(改造社、1922)は一大ベストセラーとなった。
- 56) 野村隈畔は1921年に、有島武郎は1923年に自らの恋愛論に則って心中している。
- 57) 大杉栄「ベルグソンとソレル」『早稲田文学』1916・4
- 58) 左右田喜一郎「思想問題として見たるサンヂカリズム—ベルグソン哲学との交渉」『三田学会雑誌』1917・8 また、山川均「唯物論者の見たベルグソン」(『新社会』1916・3)もソレルを批判して、ベルクソンの「非理知主義」は「反動哲学」にすぎないとしている。
- 59) 丘浅次郎は『進化論講話』(開成館、1904、改版1913)の末尾で、社会進化論について説いているが、「人間が尚進化の途中にあるものとすれば、万世不易の善悪の標準といふ様なものは、到底定められぬ」(p. 732)として、道徳の基準を適者生存に置いてしまう。そして、丘は勝者がつねに正しく、犯罪者は抹殺すべきで、弱者による革命にも反対するという過激な立場をとつ

- た。大杉は丘を批判しているが（「丘博士の生物学的的人生社会観を論ず」『中央公論』1916・5）、そもそもナチズムの例を引くまでもなく、進化論が保守的な体制の肯定にも容易に結びつくという問題は避けがたいものであった。
- 60) Henri Bergson, *The Meaning of the War, life & matter in conflict*, translated by Wildon Carr, T. Fisher Unwin, 1915. これは1914年の道徳政治学学士院での講演（“Discours en séance publique de l’académie des sciences morales et politiques”, 12 décembre 1914, dans *Mélanges*, PUF, 1972, pp. 1107-1117）の英訳である。
- 61) 中沢臨川「ベルグソンの戦争及び現代文明観」『雄弁』1916・1
- 62) 中沢臨川「私の戦争観」『第三帝国』1914・9
- 63) 中沢の戦争観については、中山弘明「中沢臨川論—戦争と批評言語」（『芸文と批評』1996・11）が詳しい。
- 64) 勢多左武郎「ベルグソンの戦争観」『洪水以後』1916・2
- 65) 勢多が依拠した英訳には「An implacable law decrees that spirit must encounter the resistance of matter」（*The Meaning of the War*, op. cit., p. 38）とあり、勢多はこの must を「ねばならぬ」と訳したものであるが、must はこの一度だけで、勢多の訳文のように三度も登場しない。また、そもそも仏語原文のこの箇所には must に相当する語はない。
- 66) Bergson, “Discours en séance publique de l’académie des sciences morales et politiques”, op. cit., p. 1116.
- 67) スーレーズは、ベルクソンがこの講演で「死の熱力学」について語り、文明と野蛮の戦いの調和といった目的論的な進化論をいっさい否定していることに注意を喚起している（Philippe Soulez, *Bergson politique*, PUF, 1989, pp. 135-144. et p. 284f）。
- 68) だが、西田はこのあとベルクソンと新カント派を截然と区別するようになり、この引用部分は『思索と体験』増訂版（岩波書店、1922）以降は削除されている。ただし、西田はその後も新カント派を存在論に近いものと見ることもあり、大正期前半の西田の新カント派評価はかなり揺れていたことが伺える。「現代の哲学」（『哲学研究』1916・4）には、「リッケルトの如きも明に知識以前の世界、体験の世界といふものを認めて居る。唯此の如き世界は知識以前なるが故に、我々は之に就て何事もいふことはできぬといふまでである」。また、「フッサールの現象学の世界も一種の直観の世界」という記述がある。当の新カント派も変遷著しく、たとえばヴィンデルバントは「直観」を認めるようになるし、リッケルトは『認識の対象』で価値一元論に〈存在〉を還元したが、その後分離させて再び存在と価値の接合にとりこんでいる（九鬼一人『新カント学派の価値哲学—体系と生のはざま—』弘文堂、1989、第2章）。
- 69) 「京都に来た始め、余の思想を動かしたものはリッケルトなどの所謂純論理派の主張とベルグソンの純粹持続の説とであつた。後者は之と同感することによつて、前者は之から反省を得ることによつて、共に多大の利益を得た。（中略）現今哲学の要求は寧ろ此等の思想の総合にあるのではないかと思ふ」。ただし、西田は「京都に来た始め」（1910年）の時は、実際には両者を分けずに「純粹経験」の下に融和した形で捉えていた。
- 70) 西田幾多郎『自覚に於ける直観と反省』岩波書店、1917（『西田幾多郎全集』第2巻、岩波書店、1965、p. 3f.）
- 71) 西田『自覚に於ける直観と反省』前掲書、p. 16.
- 72) 西田は「論理の理解と数理の理解」（『芸文』1912・9）では「デデキントによれば、或体系が自分の中に自分を写し得る時に無限である」と述べている。デデキントの無限論はカントールの対角線論法に比せられるもので、『思索と体験』三訂版（岩波書店、1938）で付けられた注記

に、「自覚」論はここから想を得たとある。

- 73) 檜垣立哉『西田幾多郎の生命哲学—ベルクソン、ドゥルーズと響き合う思考』講談社、2005、p.36f.
- 74) 唯物論の全盛は1921年頃からであるが、その前にすでに、内田繁隆「西田博士並に田中王堂氏の哲学傾向論じて哲学の将来に及ぶ」(『六合雑誌』1919・7)で、西田の哲学はプラグマティズムと対比されて、観念論的であり、実践的ではないと批判されていた。
- 75) 上田閑照『西田幾多郎を読む』岩波書店、1991、pp.261-301.
- 76) 九鬼周造は“Bergson au Japon” (op. cit) で、「日本では、我々はベルクソン哲学によって新カント派から「現象学」に導かれた」と述べている。

付記、本稿は、学習院大学文学部人文科学研究所共同研究プロジェクト「明治期以降におけるフランス哲学の受容に関する研究」(平成16～18年度)による研究成果の一部である。関係諸氏からは度重ねて貴重な御教示を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。

大正期におけるベルクソン哲学の受容

宮山昌治

ベルクソンは多くの日本の文化人に大きな影響を与えた哲学者である。ベルクソン哲学は日本では1910年に紹介されたが、紹介後すぐに翻訳や解説書が多数刊行されて、〈ベルクソンの大流行〉を引き起こすに至った。ベルクソンは一躍日本の思想界の寵児となったのだが、この流行は足かけ4年で終わってしまう。なぜ、流行はあっさりと終わってしまったのか。その原因として挙げられるのは、ベルクソン受容における解釈の偏りである。

そもそも、ベルクソン哲学が受容される以前の日本のアカデミズムでは、新カント派の認識論が主流であり、「物自体」を直接把握しようとする形而上学は避けられる傾向にあった。だが、このアカデミズムに対する抵抗として、論壇ではしだいに形而上学を復興させる動きが盛んになり、ベルクソン哲学が大いに注目を集めた。ベルクソン受容では、『試論』の「持続」と「直観」、『創造的進化』の「持続」の「創造」が紹介された。すなわち、「物自体」を「持続」と捉えて、それは「直観」によって把握できるものであり、かつ「創造」性を有するものと言うのである。ところが、これはベルクソンの紹介としては偏ったものであった。そこには、『物質と記憶』の「持続」と「物質」の関係がほとんど紹介されていない。それは、ベルクソン受容が唯心論の立場をとっており、唯心論では「物質」は排除すべきものでしかなく、「持続」と「物質」の関係を説明することが困難だったからなのである。

しかしそれでは、「持続」が「物質」のなかで、いかにして現実に存在するかを問うことができず、「持続」は観念でしかなくなってしまう。結局、ベルクソン受容は唯心論の枠組みの外にある現実存在するもの、すなわち「物質」や、ひいては「他者」についても論じることができないということになり、ベルクソンの流行は一気に衰退に向かった。だが、その後の唯物論の隆盛は、ベルクソン受容が先に「物質」や「他者」の問題に直面していなければ、存在しないものであったし、さらに新カント派の変形である大正教養主義も、新カント派とベルクソン受容の対決を経て生まれたものであった。したがって、大正期のベルクソンの流行は日本の思想史において、きわめて重要な意味をもつ〈事件〉であったと言えるのである。

キーワード【アンリ・ベルクソン ベルクソンの流行 新カント派 唯心論 物質】

On Bergson in Japan: The Vogue of Bergson in the Early Years of the Era of Taisho

Masaharu MIYAYAMA

In Japan, the philosophy of Henri Bergson was first introduced in 1910. From 1912, many books and papers discussed Bergson, and his philosophy came into vogue. At that time, the Japanese philosophical society maintained the epistemology of Neo-Kantism and refused to acknowledge “Ding an sich” (the thing itself), which metaphysics had tried to grasp immediately. Bergson insisted on acceptance of “Ding an sich” by “intuition”, so the people who rejected Neo-Kantism enthusiastically agreed with him.

But the vogue came to an end around 1915, and publicity about Bergson disappeared rapidly. The vogue declined because of the interpretation that Bergson’s philosophy favored “Idealism” based on the pan-conscience. As that interpretation was ineffective at treating “matter” and “the Other”, *Matière et Mémoire* (Matter and Memory) hardly received attention during this time. The partial interpretation brought the vogue to a crisis.

Though the vogue declined, the prosperity of Materialism and Socialism that lasted through the 1920s didn’t exist without the vogue had revealed the fault of “Idealism”. Therefore, Bergson’s significance in the history of modern Japanese thought cannot be overlooked.

Key words: Henri Bergson, Vogue of Bergson, Neo-Kantism, Idealism, Matter.